この映画館に行きたい！

第４回　ポレポレ東中野の巻

猛暑も過ぎた9月某日、この企画では恒例となった(?)小雨降る夜、JR東中野駅北側出口より徒歩1分の「ポレポレ東中野」へ。山手通りから一本東に入った通り(道中にはam/pmやミスドあり)沿いのポレポレ坐ビル地下1Fにあるミニシアターです。

外観は濃い茶をメインに黄が差し色として用いられたこ洒落たカフェのような雰囲気(夜にはライトアップされます)。入口階段横のスペースにはチラシが敷き詰められている。本会報も置いてあるはずなので物色しながら探してみてね。階段からロビーまでの壁には上映作品に関連するディスプレイで徹底的に装飾。見てるだけで映画の気分に浸れます。作品ごとに変化するディスプレイに見とれながらロビーに着き、受付でチケット(整理番号つき)を購入、いざ場内へ。
席数の割にスクリーンが大きい！腰掛けてみると納得、スクリーンが上の配置されているため、前の人の頭上を気にせず見ることが出来るのだ。ドリンクホルダーがあれば文句ナシ！ペットボトル症候群には難儀…。座席の肘掛は広くて位置もちょうど良く、足が伸ばせる余裕もありゆったりくつろげる空間。また客席最後列には８席分の車いす用スペースも用意されており、入口からエレベーターを利用してそのまま入場できるなどバリアフリー環境への取り組みも万全です。
「ポレポレ」とはスワヒリ語で「ゆっくり、ゆっくり」という意味。こだわりのラインナップとそれに伴うイベントや場内装飾で我々を魅了する「ポレポレ東中野」へ、時間をとってゆったり訪れてみてはいかがでしょう。

今回参加したイベントはコレ！

ポレポレ東中野プレゼンツ「映画をみせていくこと」
—白熱１時間超トークライブ+ゲストがすすめる映画２本！上映—

9月25日(土)第３夜「CLOSE UP！資金と国家助成～銀行から、文化庁から、何を得る？真夜中の算段～」開場23:00　開演23:30

ゲストは文化庁文化部長。子供たちからはワッキーと慕われる寺脇研氏を迎えてのトークライブ！司会はかつてキネマ旬報の連載などで有名な映画ジャーナリスト大高宏雄氏、イベントオブザーバーとして『ツィゴイネルワイゼン』('80)で、「配給会社に頼むより自分で映画館(エアドーム型)を作っちゃう」という画期的な配給を行った名プロデューサーの荒戸源次郎氏(「赤目四十八瀧心中未遂」('03)監督)、ホストはポレポレ東中野支配人の大槻貴宏氏。寺脇氏の文化庁側の見解や未来ビジョンを緊張感溢れる雰囲気でたっぷり聞かせてもらった。
支援する際のシステムの問題や文化助成も方向転換(入口＜作り手＞支援から出口＜上映＞支援へ)などなど。荒戸氏の自由闊達な語りも去ることながら、切れ者ゲストたちの生々しいトーク体験には熱いものを感じて、深夜から力がみなぎるのでした。このイベントは、映画を"みせる"達人や、"つくる"キーパーソンなど多彩なゲストを迎えて、１年間継続して開催される予定。HPで今後の予定をチェックして出かけてみて！映画企画持ち込みもOKとのこと(イベント前の土曜日締め切り)。ゲストの貴重なぶっちゃけ話もきける!? オールナイト明けの朝にはビール片手に熱く語りたくなってしまうこと間違いなし！

ポレポレ東中野

2003年４月BOX東中野閉館後、プロデューサーに大槻貴宏氏(短編映画館トリウッド代表)を迎え、同年9月にリニューアルオープンしたミニシアター。注目株の新人作家作品、ドキュメンタリー作品を通して、アーティスト・ニュース・社会問題など、情報の発信源となるような映画館を目指す。

〒164-0003
東京都中野区東中野4ー4ー1
ポレポレ坐ビル地下
TEL 03-3371-0088
客席数　102席　スペイン・フィゲラス社製
URL:http://www.mmjp.or.jp/pole2/

10月からは大槻氏オススメ、坂上香監督『ライファーズ～終身刑を越えて～』(日/92分)、『タイマグラばあちゃん』(モーニングショー/日/90分)など、どちらも対象を10年以上追いかけた珠玉のドキュメンタリーを上映予定。

THEATER● interview

～作る人は、見せるということにゴールを設定して欲しい～

ポレポレ東中野支配人大槻貴宏氏インタビュー

高校時代より自主映画制作に携わり、アメリカの大学で映画プロデュースを専攻し、制作全般を学んだ大槻氏。帰国後、1999年下北沢に日本初の短編映画専門館トリウッドを開館し、昨今の短編映画ブームの火付け役となる。2003年にポレポレ東中野の支配人に就任した大槻氏の次なる一手は？

——上映作品が自主映画からドキュメンタリーまでバラエティに富んでますね。

大槻： 本当に感動したもの、笑ったもの、泣いたもの、というシンプルな基準で選んでいます。あと一つは、作り手に本当に見せようという気があるかないか。監督と話をしたりします。最近では『あしがらさん』の飯田基晴くん。本人にも言ったけど、作品的にはイマイチかもしれない。でも飯田くんという人物は恐ろしく魅力的で、それが作品から出てるんです。これはやってみようと。結果、見事成功でした。僕は「コレがやりたい」と言う人の作品をやりたい。別に国籍も問わない。敷居は低くしてるんで、いろんな人が企画や作品を持ち込めるようにしてますよ。

——作品の力も然ることながら、監督自身の人柄や熱意というところも見ているんですね。

大槻：火の打ち所のない作品は何もしなくてヒットするんですよね。けど、ほとんどの作品が残念ながらそうではない。そこで何で区別するかというと、見せようと思う意識です。例えば、荒戸さん（『赤目四十八瀧心中未遂』＜以下赤目＞のプロデューサー荒戸源次郎氏）は赤目をやりましょうって話に合わせて、毎週オールナイトをやりたいと言うんです。「なんでそんなに一生懸命やるの？」って聞くと「この映画はまだまだ赤ちゃんで、面倒みなくちゃならない。来年になったらちゃんと独り立ちするから」って言うんです。オールナイトで他の作品とやるとか、トークショーつけるとかして人目をつけとけば、そのうち赤目が作品として動き出すという。作品は自分の子どもなんですよね。そのあとどう育てていくかが大事。作り手はより多くの人に「見てもらう」ということにゴールを設定して欲しいです。そうすると、次に作るという時に作品の質がガラッと変わりますから。そう思ってイベントも始めました。

——「映画を見せていくこと」のオールナイトイベントですね。すごく面白かったです！

大槻：ありがとうございます。きっかけは、荒戸さんと会ってすごく面白い話を聞けたからなんですけどね。多くの作り手は、誰かにみつけてもらえないかとか、どこかの配給が付いてくれればいいなとか、他人任せなんです。ある意味、一番面白いところを逃してるんじゃないかという気がします。『赤目』なんかは配給はないですからね、自分たちでやってしまう。その面白さを伝えることができればいいんじゃないかと思ったわけです。

——「ポレポレ東中野・トリウッド提携プロジェクト」★で深川栄洋監督が見事基準を突破、ポレポレ東中野にて上映デビューされますよね。今後のご予定は？

大槻：週一くらいで企画を揉んでいます。まだ出せる状態じゃないですが、今後どうなっていくか楽しみですね。撮るのは来年でしょう。来年中には公開できればいいですね。

——最後に今後の展望をお聞かせください。

大槻：やっぱりポレポレ東中野という名前をまず知ってもらうこと。幸い『赤目』や『HARUKO』があって、すごくラッキーだった部分がある。二年目はもっと分りやすくしたいですね。大道を進んで行きたいと思います。つまり、本来映画を見せたいと思っている人との信頼関係を作ってやっていく、それが映画という商売の大道ではないかと思います。

★ 下北沢「トリウッド」ロードショー(新作短編)で稼働率40％or約2500人以上の動員を記録したら、「ポレポレ東中野」での新作長編公開を約束されるというもの。初の基準突破作家は2004年2月公開「紀雄の部屋」の深川栄洋監督(第2回TAMA NEW WAVEフィルム部門グランプリ作家!!)。最新作はテアトル池袋にて短編公開(10/30～11/12)予定。気になる方はチェックしてみて！